科学技術と原子力に関する2つの考察
―ハイデガーとヤスパースを手掛かりにして―

平　野　明　彦

Akihiko Hirano. Two Considerations of Technology and Atomic Energy ―Centering around Heidegger and Jaspers―. ***Studies in International Relations.*** Vol.42, Consolidated Edition. February 2022. pp.47-59.

Martin Heidegger and Karl Jaspers were two distinguished contemporary German philosophers of the 20th century. Both of them indeed represent some leading European existential philosophers who commented occasionally upon a modern technology and atomic energy, but Heidegger is considerably different from Jaspers in thought.

In this paper, first, I attempt to show the character of considerations of technology by Heidegger and Jaspers. Secondly, I will clarify some radical problems of atomic energy centering around arguments by them. Finally, comparing and contrasting two arguments about technology, atomic energy and atomic bomb, I will explain the essential similarities and differences between Heidegger's consideration and Jaspers' one.

はじめに

20世紀が世界戦争と科学技術ならびにグローバル化の時代であることを否定する人は、おそらくいないだろう。さらに、21世紀に入った今もなお、私たちの世界がこうした幾つかの主要要因によって特徴づけられていることもまた、周知の事実である。たしかに、再び第1次大戦や第2次大戦のような全面戦争が繰り返されることはないとしても、人類が世界戦争の危機を脱したと断言することなど到底できない。それどころか、今日科学技術は、ますますグローバル化を加速させ、たとえ地球上のどこで生活するにせよ、およそすべての人間にとって、それなしには人間的な生活自体が成立しえないほどに重要性を増している、と言えよう。

また、3.11の東日本大震災とその後福島原発を襲った未曽有の原子力発電の事故以来、日本のみならず世界中で、原子力をめぐる数々の議論が巻き起こったことも、記憶に新しい[1)]。そうした中にあって、3.11以降特にわが国において、20世紀ドイツの代表的な哲学者の一人ハイデガー（**Heidegger M.**）の技術論と原子力をめぐる論考（洞察）がこれまでしばしば取り上げられている[2)]。しかも、最近出版された『原子力時代における哲学』（2019）の中で國分功一郎は、次のように述べている。20世紀以降の哲学者たちのなかで、おそらく1950年代においてハイデガーだけが原子爆弾ではなく、原子エネルギー自体の危険性について深い洞察を巡らせていたのだ、と[3)]。他方、もう一人の20世紀ドイツの哲学者ヤスパース（**Jaspers K.**）に関しては、事情は全く異なる。というのも一部のヤスパース研究者を除いて、科学技術のみならず、原子爆弾や原子エネルギーへの彼の積極的なコメントが、これまでほとんど顧みられることはなかったからである[4)]。

そこで本論稿において、科学技術と原子力に対する見解は今日まで枚挙に暇がなく、そのすべてに言及することなどもちろん不可能ではあるものの、少なくとも20世紀のヨーロッパのみならず21世紀の今もなお、いやむしろ今こそ、喫緊の課題の一つと見なしうるこうした問題の本質について、ハイデガーとヤスパースのコメントを対照しつつ、両思想の特徴を比較検討する。そしてそのことを通して、両思想の持つ現代的な意義に、再び新たな光を当てることを目指したい。

1．二人の〈技術論〉の特徴について

（1）ハイデガーの〈技術の本質〉への問い

まず、ハイデガーの技術論から簡単に見てゆくことにする。

今ではよく知られるようになった『技術への問い』(『技術とは何だろうか？』) という小論の中で、ハイデガーは、現代において日に日に重要性を増している〈技術〉という言葉の意味を、改めて根源から問い直す[5)]。通常私たちは、〈技術〉という言葉からテクノロジーや技術革新というような言葉を連想する。ここで問題なのは、こうした日常的なイメージとハイデガーの定義との相違である。

上述の小論の冒頭において、まず、技術について問うことと技術の本質について問うこととの違いを強調し、たとえ技術にどのように取り組もうとも、技術の本質を洞察しない限り、依然として「私たちは至るところで、技術の鎖につながれて不自由なままで」あると指摘する。さらに、「技術を中立的なもの（Neutrales）として考察するとき」に、「私たちが最もみじめに技術に引き渡されている」とまで断定する。少なくとも、科学や技術や道具自体は人間にとって中立的なもので、それを使用する人間次第で毒にも薬にもなりうると考えるのが常識的考えと思われるのであるが、ハイデガーはこうした常識を退ける。むしろ、技術を中立的に眺めるという「この観念は、私たち現代人がとりわけ信奉したがるもの」だが、「技術の本質に対して私たちの目を完全に塞いでしまう」のである[6)]。

では、技術の本質とは、どのようなものなのだろうか？　ハイデガーによると、この問いに対して、当然次のような答えが提起される。「1つは、技術とは目的のための手段である。もう一つは、技術とは人間の行ないである、－－この2つの技術規定は属し合ってい」る。「というのも、目的を設定して、そのための手段を調達し、利用することは、人間の行ない」にほかならないから。「技術とは何であるか、のその何には、製造すること、および道具、器具、機会を利用することが属しており、そのように製造され、利用されるもの自身が属しており、その道具類が役立てられる必要や目的が属してい」る。「このように整えられた設備全体が、技術なので」ある[7)]。もちろん、「現代技術も目的のための手段である」限り、決して例外ではない。「それゆえ、道具手段的な技術観は、技術との正当な関係に人間を導くためのいかなる努力をも、規定して」おり、「技術を手段として適正な仕方で操作すること」、つまり「技術を制御」すること、「ここにすべてが懸かってい」る、ということになる[8)]。

しかしながら、技術を目的のための手段（道具）と規定し、それを制御する全工程・意志そのものをも技術に含めることで、いまだその本質に到達したわけではない。ハイデガーは、その特性を古代ギリシャにまで遡り、「目的が追求され、手段が使用され、道具手段的なものが支配的になるところでは、原因性、つまり因果性が支配している」と言い、伝統的な4つの原因を列挙する[9)]。例えば銀の皿を例に挙げると、1つ目の要因は原料・素材としての銀であり、2つ目はお供え物の用具としての姿かたちであり、さらに3つ目が奉納と供物であり、最後の4つ目がお供え用の皿が供される始めのきっかけを与える銀の鍛冶職人（銀の皿の製作者)、ということになる[10)]。そしてそこから、通常の理解を超える、次のような見解が導かれる。

銀職人に代表されるような手仕事における製作技術の特徴とは、使用目的に合わせた単なる道具の製作ではない。それは、より本質的には「こちらへと前にもたらして産み出すこと〔Her-vor-bringen〕」であり、さらにこのことは「隠されたさまの方から、隠れなき真相〔Unverborgenheit〕へと前にもたら」すことを意味する。「こちらへと前にもたらして産み出すことがおのずと本有化されるのは、隠されていたものが、隠れもなく真であるものに至るかぎりにおいてのみで」あり、「この真に至ることは、われわれが顕現させること〔Entbergen〕と名づけるものに拠っており、その中を揺れ動」く[11)]。したがって、ここで技術の本質は、これまで隠されていた何ものかを顕現させること、と定義される。しかもハイデガーによれば、この真理の特徴は職人の製作だけではなく、芸術作品の製作や自然（ピュシス）の現象にも当

てはまる。

それに対して、近・現代の科学技術は、こうしたギリシャ以来の技術の本質（ポイエーシス）と大きく異なっている。「現代技術」もまた、ポイエーシス同様「顕現させることの一種」であるという指摘に続き、ハイデガーは現代技術の特徴について次のように述べる。

> 現代技術をあまねく支配している顕現させることが、おのずと展開していくと、ポイエーシスという意味でのこちらへと前にもたらして産み出すことになる、ということはありません。現代技術において支配をふるっている顕現させることは、一種の挑発すること〔Herausfordern〕です。つまり、自然をそそのかして、エネルギーを供給せよという要求を押し立て、そのエネルギーをエネルギーとしてむしり取って、貯蔵できるようにすることです[12)]。

さらに土地利用と農業を例に挙げて、「挑発」の意味がより詳細に述べられる。

> ある地域が挑発されて、石炭や鉱物が採掘されるようになります。今や、地表が顕現させられて炭鉱地区となり、土地は鉱床地帯となります。畑の様子も一変します。かつて農夫が畑を耕していたときの、その耕すこと〔bestellen〕はまだ、世話をする、面倒をみる、という意味でした。農夫のこの営為は、耕地をべつに挑発しません。－－　しかしいつしか、土地耕作も、自然をかり立てる別の種類のベシュテレン〔Bestellen〕、つまり徴用して立てることに吸い込まれてしまいました。こちらのベシュテレンは、挑発するという意味で自然をかり立てるのです。農業は今や、機械化された食糧産業なのです[13)]。

以上のようにハイデガーによると、伝統的な農業と自然を挑発する近代的な土地利用には、明らかな相違がある。前者と異なり、後者は自然を挑発し、自然をかり立てるのである。しかも、ここで言う土地利用や挑発は、一見するとF. ベーコン以来のScientia est potentia（知は力なり）という標語に代表されるような、人間による自然支配を指しているように思われる。ところが、ここでの「挑発」は自然にのみ向けられているわけではない。それは、自然のみならず、われわれ自身にも向けられているのである。

それゆえハイデガーは、さらに次のように言う。「現代技術をあまねく支配している顕現させることは、挑発するという意味でかり立てる性格をもってい」る。しかも「このことが生じるのは、自然のうちに秘め隠されたエネルギーが開発され、開発されたものが変形させられ、変形させられたものが貯蔵され、貯蔵させられたものがふたたび分配され、分配されたものがあらためて変換させられることによってで」ある[14)]。ところで、「挑発してかり立てるはたらきを遂行しているのは、「明らかに人間」以外の何ものでもない。とはいっても、ここで技術への関与として人間の主体（主観）が躍り出るわけではない。むしろ、われわれ人間にそのようなことができるのは、「人間自身が、自然エネルギーをむしり取るようにと、とうに挑発されているからこそ」、である。しかも、「人間がそうするようにと挑発され、徴用して立てられているのであれば、人間もまた、徴用して立てられた物資に属しているので」あり、むしろ「自然よりいっそう根源的に属している」ということになる[15)]。

さらにハイデガーは、現代技術に特有の、「かの挑発する要求のことを」より先鋭化し、「ゲ－シュテル〔*Ge-stell*〕つまり総かり立て体制、と呼ぶ」[16)]。「総かり立て体制とは、人間をかり立てる、すなわち徴用して立てるという仕方で現実的なものを徴用物資として顕現させるよう挑発する、かのかり立てるはたらきを取り集めるもののこと」であり、「現代技術の本質において支配をふるっていながら、それ自体は技術的なものではない、顕現させる仕方のこと」なのである。「これに対して、技術的なものには、ピストンの総体、駆動の総体、骨組みの総体として知られているものすべてが属しており、組み立てと呼ばれるものを構成する徴用物資の断片すべてが属してい」る[17)]。

以上、ハイデガーの技術とその本質に関する洞察を簡単に概観したのであるが、その特徴として、少なくとも次の3点を挙げることができよう。第一は、自然科学のように、技術が人間にとって中立的なものではなく、むしろ人間の特定の行為と意志と不可分の何ものか、と見なされている点である。第二の特徴として、これまで隠されていたものを顕現させるという意味での伝統的なポイエーシスとは異なり、現代技術は、特定の目的にしたがって自然を挑発し、かり立てる何ものか、ということが挙げられる。しかしそれだけではない。より重要なのは、自然が人間によって挑発されるだけでなく、むしろ現代技術が人間自身を挑発し、徴用してかり立てるという洞察であり、そのような意味で、技術の本質が「総かり立て体制」と命名されたことである。

（2）ヤスパースの〈科学技術論〉の特徴

次に、ヤスパースの技術論、特に現代の科学技術に関する見解を概観する。

『現代の精神的状況』（1932）の中で、ヤスパースは、「大衆の支配」・「機構の支配」の重要性と共に、現代の科学技術のもつ特別な歴史的意義を次のように強調する。つまり、われわれの「技術的世界の展開」は、「従前のすべての時代に比べてみるとき、道具使用一般へ踏み出した最初の一歩とおなじくらい大きなものである。それというのも、この遊星をその資源とエネルギーを利用しつくすための唯一の工場に変えてしまうという展望が、認められるからである」。古代ギリシャやローマの「現実的な自然支配」に比べて、「人間は、2度目の今度は、自然をぶち破り、自然を見棄てて、自然が自然としてはこれまで決して創り出したことがないばかりか、今や自然と効力を競い合うことになるような仕事を、自然のなかで実施しようとする」[18]。

このように、すでに1932年にヤスパースは、近現代の科学技術の特徴として、地球という天体自体が、可能なかぎり資源やエネルギーを利用し、これまで自然には存在していなかったような〈新たなもの〉を作り出すための生産工場へと変えられてしまうという点を挙げている。しかしながら、それにもまして重要なのが、現代の技術のもつ画期的な新しさは、世界から神話や神が排除されたことや新たな技術革新によっては捉えられえない、という指摘であろう[19]。

さらに、1949年に出版された『歴史の起源と目標』において、まず、近現代の技術が「人間生活の形成を目的としての、科学的人間による自然支配の営み」と定義され、直ちにその功罪が指摘される。すなわち、一方で技術によって「人間は窮乏の重荷から解放され、人間に好ましい環境界の形式を獲得するのである」が、他方で「技術によって、自然が様相を変え、人間の技術的行為が人間に逆作用を及ぼす」。したがって重要なのは、「人間の労働方式、労働機構、環境形成が人間自身に変化を与えている事実」にほかならない[20]。さらにそこから、技術によって引き起こされる不可避的な帰結として、以下の特徴が導かれる。「技術は環境界における人間の日常生活を徹底的に変革し、労働方式や社会をして新たな軌道を取らざるをえなくした。すなわち大量生産方式が取られ、社会全体の生活を技術的に完成された機械へと変え、全地球をあげて単一の工場と化した」[21]。

すでに『現代の精神的状況』の中で指摘されていた、〈地球を単一の生産工場へと変える技術の特徴〉が、ここでも繰り返し述べられている。自身科学者でもあったヤスパースが、たしかに科学技術自体は善でも悪でもなく、むしろ中立的な手段に過ぎないという認識をもっていたことは否定できない[22]。しかしその反面、やはり科学技術が人間の生活自体をまったく別のものへと変質させてしまう危険を孕んでいる〈パンドラの箱〉である、という洞察を彼が持っていたこともまた事実であり、このことは彼の技術論を語る上で、看過されてはならないだろう。

ここでもう一度、『歴史の起源と目標』から、技術の本質に関する定義を列挙する。第1が「手段としての技術」であり、第2が事実的・客観的な認識の主観としての「悟性」（Verstand）である。「技術は悟性の働きに立脚」し、「合理化一般の一部」である。3つ目として「技術は一つの能力」すなわち「力」（Macht）であるが、「自然を支配する力は、ただ人間の目的ゆえにその意義をもつ」こ

とが挙げられる。「しかも技術の意義はこれだけにつきない」。4つ目に、次のような、人間に特有の性質が指摘される。「手段であるということ、道具を作るということは、一つの統一の理念、すなわち閉鎖されてありながらも絶えず拡大されて行く人間の環境形成という統一の理念のもとに立つ」。動物同様「人間も自己に固有な環境に結びつけられていながら、これを乗り越えて自己の環境を無制限に創造する」[23)]。特に最後の記述は、絶えず新たな力と認識の拡大を求めるニーチェ的な〈力への意志〉を彷彿とさせ、その意味で、技術自体のもつある種〈デモーニッシュな〉特性を連想させる。近代技術的世界に必要な要素として、「合理性」と並んで「自然科学」「発明精神」「労働組織」[24)]の3つを挙げたのち、ヤスパースは、「技術の魔性（Dämonie）」について次のように述べている。やや長文だが、そのまま引用させていただく。

> 技術はまさに、人間の労働のあり方全体とともに、人間そのものをも変えようとしている、という一事は確実である。人間により産出された技術を、人間はもはや回避することはできない。更にいえば、技術は単に見きわめがたい好機のみならず、見きわめがたい危険をもたらしているのも確実である。技術はいっさいを拉し去る独立した暴力となったのである。人間は何はさて置き技術の手におち、この事実に気づかず、この事実がどれほどに行われているかを認めない。しかし今日では誰が、自分がこの事実を見抜いていると、あえて言えるであろうか！　そうはいいながら技術の魔性は、それを見抜く道にあって初めて克服されうるのである。禍の原因となるものは、おそらくわれわれ自身の手で制御しうるであろう[25)]。

以上のように一見するとヤスパースは、一方で技術には、人間が見通すことのできない「好機」だけではなく、同時に「魔性」とも言うべき「危険」が潜んでいるものの、しかし他方でそれが、人間によって制御可能であろうという楽観論に陥っているように思われる。しかしながらヤスパースが、人間には皆目検討もつかない「技術の魔性」に関して、本当にこのような短絡的な思考を展開していたのだろうか。物事を一面的に捉えることを避け、両極の緊張の間を浮動することを説く彼の基本的立場に鑑みると、このように結論付けることはやはり早計と言わざるをえない。実際、前述した引用には次のような文章が続いているのである。「しかしいかなる計画にもやはり、かの〈魔性〉、見きわめがたいものの可能性が潜んでいる。技術の禍の技術的制御は、禍を増加するかもしれぬのである」。それゆえ「技術そのものによって技術を克服するという課題を、全体として解決可能と考えるのは、禍の新たな道となる。偏狭な見解への熱狂は、実際正しく技術的に可能であるものを、かえって想像上の技術に眩惑されて見落としてしまう。しかしながら、人間を支配している技術を、人間がみずからの手で、いかにして再び支配するか、という問題はあくまで残る」[26)]。

以上ヤスパースが、〈技術の魔性〉に対して安易な結論に達することを避け、技術の断絶という現実を見据え、しかも悲観論と楽観論という両極の緊張を保ちつつ、〈技術の制御〉の可能性を模索しようとしていることは疑いない。しかも、こうした〈技術の魔性〉の指摘は、彼の技術論の重要な特徴の一つであり、現代の科学技術を考えるうえでも、けっして看過されえないだろう。

2．二人の原子力へのアプローチをめぐって

（1）原子力と原子爆弾に関するハイデガーの見解

前述したように、3.11の原発事故以来特にわが国において、原子力をめぐるハイデガーの言説が衆目の見るところとなっている。

まず、『技術への問い』（『技術とは何だろうか？』）を中心に、原子力に関する見解を一瞥する。前述した農業と土地利用のところで、彼は、原子力について次のように言う。

> 農業は今や機械化された食糧産業なのです。大気は窒素の放出に向けてかり立てられ、土地は鉱物に向けて、鉱物はたとえばウランに向けて、ウランは原子力に向けてかり立てら

れます。その原子力は、破壊または平和利用のために放出されうるのです[27]。

たしかにここで、原子力が特別なものとして描かれているわけではない。少なくとも平和利用のための原子力発電は、自然を挑発して電力を徴用している点で、ライン川の水力発電所と何ら変わるところはない。このことはまた、原子力のみならず原子爆弾に関する以下のような文章からも、推測されうる。「科学的知識は、その領域つまり対象の領域において強制力をもっていますが、物を物としてはとっくに虚無化してしまっています。これは、原子爆弾が爆発した時点よりもずっと前からそうなのです。原子爆弾の爆発とは、物が虚無化されるという事態がとっくの昔から生起してしまっていることを確証するためのあらゆる粗暴な証拠のうちの、最も粗暴な証拠でしかありません」[28]。

しかしながら、ハイデガーの原子力に関する主張は、やはりその他の諸々の技術に関するそれとは一線を画するようにも思われる。たとえば森一郎は、『核時代のテクノロジー』（2020）において、技術の本質が両義的でもあるというハイデガーの指摘を紹介し、1953年11月に行なわれた「技術」講演の原子力に対する言説（「原子力は、破壊または平和利用のために放出されうる」）に続いて、次のようなコメントを加えている。少し長いが、引用させていただく。

ハイデガーに言わせれば、破壊にしろ平和利用にしろ、原子エネルギーをかり立てるシステムの内部で動いている点では、大同小異なのだ。

これを十把ひとからげの暴論と考える向きもあろうが、私はじつに卓見だと思う。少なくとも、「原子力の平和利用」という言葉の魔力にたちまち眩惑されて、そこに救いがあると信じた人びとが多かった中、事態を大局的に見ていたと感心する。1955年の講演「放下した平静さ」での「檻を破って暴走する危険」云々の指摘の先見性も、思い起こされる。ハイデガーは「原子力の平和利用」問題を軽く見ていたのではない。むしろ、原子力発電の制御可能性への問いを驚くほど敏感に受け止めていたのである[29]。

3.11以降の世界に生きる人間にとって、とりわけ日本に生きるわたしたちにとって、原子力発電が容易に制御可能であるとか、絶対に事故の発生を防ぐことができる、というような安全神話をもはや信じることなどできないことは、ある意味当然とさえ思われる。しかしながら、森も指摘しているように、多くの科学者のみならず政治家もまた、その平和利用の可能性に浮かれていた1950年代に、ハイデガーが上記のような原子力の本質的危険性への洞察を有していたことは、やはり驚くべきことと言わざるをえないだろう。

さらにもう一つ、忘れてならないことがある。それは、ハイデガーが原子爆弾の破壊力や殺戮の危険性ではなく、むしろ原子エネルギー自体の不気味さのもつ本質的意味に注目していた、という事実である。次に、先の引用の中で森も言及していた『放下』（1959）の講演から引用する。

ひとは更に科学的探究の大胆さに驚きの目を見張りますが、その際なにも考えません。ひとは次のことを僅かも熟慮しないのであります。すなわちそのこととは、ここでは技術を手段として人間の生命と本質とに向かってある攻撃が準備されているのであり、その攻撃に比べれば、水素爆弾の爆発などは殆ど物の数ではない、ということであります。なぜならば、水素爆弾が爆発することなく、人間の生命が地上に維持される時、まさにその時こそ原子時代とともに世界の或る不気味な変動（eine unheimliche Veränderung）が立ち現れてくるからであります[30]。

ここでまず注意しなければならないのは、次の点であろう。つまりハイデガーが警告しているのは、水素爆弾が爆発することによって引き起こされる惨劇の恐ろしさなどではなく、むしろ原子力と人類との見かけ上の共存によってもたらされるであろう、世界そのものの本質的変化（不気味さ）

なのである。換言すると、原子エネルギーが人類に加える攻撃とは、核戦争による核攻撃ではなく、むしろ、原子エネルギーの平和利用によって必然的に引き起こされる世界と人類そのものの根本的変質への、或る種〈時限爆弾〉のような攻撃、とも言いうるだろう。

ハイデガーは、次の2つの変化（変質）を挙げる。第一は、「省察する追思惟」（das besinnliche Nachdenken）に対する「計算する思惟」（das rechnende Denken）の優位である。私たちが「計量を立てたり、探求を行なったり、企業を設立したり」する場合に、「与えられた周囲の諸事情を絶えず計算する、ということ」であり、「それらの諸事情を、一定の諸目的を目指して算定された企画に基づいて、計算のうちに入れる」。そして「計算する思惟は、次から次へと新しくなってゆく諸々の可能性、益々見込みの多いものになりしかも同時に益々安価に入手されるようになってゆく諸々の可能性、そういう可能性を目指して打算を廻らす」[31)]。さらに第2の出来事として指摘されるのが、現代における土着性（Bodenständigkeit）の喪失の危機である。曰く「現代人の土着性が最も内奥において脅かされているのであると」。しかもハイデガーによると、「土着性の喪失は、単に何か外的な周囲の事情とか運命とかによって引き起こされているだけではなく」、「そのうちに私たちすべてが生み入れられた時代、その時代の精神に由来しているのであ」る[32)]。こうした時代こそ、まさしく原子力時代であり、原子エネルギーの人類との平和的共存の時代なのである。

（2）原子エネルギーと原子爆弾に関するヤスパースの見解

ヤスパースといえば、真っ先に〈原子爆弾〉へのコメントが思い浮かぶが、まずは、原子力に関する言説から見ていく。『歴史の起源と目標』の中で、本質的に新しいものとして、原子エネルギーの発見が取り上げられる。「火を燃やし、道具を作ることが起こった最初の発端だけが比較できるとすれば、原子エネルギーの発見こそ、実際に火の発見との類似性をもつと考えられる。すなわち途方もない可能性と、同時に途方もない危険をもたらしたという点で。しかし火や道具の使用の開始の時代に関して、われわれは何も知るところはない。当時と同じように、人類は新規に何ごとかを開始しているのである、――さもなければ人類は、強力な破壊をすすめながら、意識なき死の墓の中にみずからを葬ろうとしているのであろう」、と[33)]。すでに科学技術とその魔性に関する言説のところで見たように、ここでも、原子エネルギーという全く新しい技術の計り知れない可能性と危機的性格が指摘されている。

さらに『原子爆弾と人類の未来』（1958）においてもヤスパースは、原子力の開発に携わる研究者（科学者）たちの微妙な立場に言及したのち、原子力をも含めた技術の進歩自体について、相反する2つの見解（世界観）を展開する。一方の問いはこうである。「原子エネルギーの解放は、ある包括的な生起の進行のなかでの一つの出来事に過ぎないのではないか？」すなわち「その基本経過のなかで起こるいっさいは人間によって考案され、構成され、実現され、したがってそれは、事の本性からしてその一歩一歩がことごとく必然的な帰結である以上、人間によって徹底的に、――中略――合理的に見通されるのではないか」、と。しかし他方でただちに、「それとも、この基本経過は、見通しのきかない、ただ神話的に呪（まじな）い出されるしかない秘密の全体のうちにあるのであるか」、という問いが生じる[34)]。

後者の問いは、さらに以下のような悲観論へと発展する。「今日、技術的な可能性は、個々別々の破壊から、地上の全生命の全面的破壊へと、飛躍をとげたのである」。したがって「原子エネルギーの解放など決して発見されなかった方がよかったのだ。そうすれば原爆も決して作られなかっただろう。選択ができるものなら、われわれは原子エネルギーを断念したに違いない」。ここでも、ヤスパース哲学に固有の〈両極の緊張関係〉が貫かれているのであるが、しかし、やはりこの文章が以下のように結ばれていることを軽視することはできない。「しかし、そのように考える者は、技術的な発展一般を最初から断念する方がよかったのだ、という帰結に到達せざるをえない。なぜならば、このような発展がひとたび進行しだすと、技術の

担い手とともに技術自体をも終わらせることになるような生の破壊による以外には、その発展は一定の位置で停止させられたり、ましてや後戻りさせられたりされえないからである。技術の最終段階を拒否することは、結果としてすべての技術の始まりを拒否することになる」[35] と。この文脈を、どのように解釈すべきなのだろうか。原子エネルギーにも、たしかに見通すことのできない〈技術の魔性〉というべきものがあるものの、しかしそれ自体は人間にとって中立的な何ものかと見なすべきである、という主張なのだろうか？　あるいは、それが人間によって作られたものである限り、人間自身が制御する可能性を断念すべきではないという、いかにも科学者らしい希望的観測、と解釈すべきなのだろうか？

次に、『原子爆弾と人類の未来』において主題化された〈原子爆弾〉に関するコメントに言及する。

第3次世界大戦の危機が叫ばれつつある東西の冷戦下において書かれたこの大著は、〈原子爆弾〉をめぐる世界情勢に焦点を当てたものである。したがって本書で、科学技術や原子エネルギーではなく、むしろ原子爆弾自体の危険性と脅威が強調されているのは、ある意味当然のことと言えよう。しかしながら、ここでヤスパースは、原子爆弾の危険性を淡々と述べているのでも、その脅威を声高に誇張しているのでもない。すなわちヤスパースによると、「原爆による滅亡は、われわれに襲いかかりひたすら甘受されるしかないような必然的過程なぞではない。むしろ、その歩みのいちいちが、破局へ通ずる道程でその歩みをなす人間にかかっている。決定する位置に立っているのは、いつの場合でも一人ひとりの人たちなのである」[36]。それゆえここで問題となっているのは、「人間の変革か、それとも滅亡か、という二者択一」[37] である。以上のように、本書において、原爆による人類滅亡の可能性が繰り返し警告されるとともに、それを阻止するわれわれ一人ひとりの決断の重要性もまたその都度示唆されている。というのも、原子爆弾は人間によって製造されたものであり、したがってまさしく人類滅亡の危機もまた、人間によって引き起こされるであろう何ものかにほかならないからである。

しかも、ここでヤスパースは、今日すでに手垢のついた例の究極の二者択一に言及する。それは、「全体主義支配か原爆か」という二者択一である。換言すると「原爆は、今日、人類の将来にとって他のすべてのものよりも脅威的である」[38]。それゆえ「まさに人類の生存の問題そのものであるこの原爆に相当するだけのねうちのある他の問題といえば、それはたった一つしかない――すべての自由と人間の尊厳を抹殺する恐怖政治的構造をもつ全体主義的支配の危険（独裁、マルクス主義、人種論などの問題がそのままこれにあたるのではない）がそれである。前者では生存が、後者では生きるに値する生存が、失われてしまったのだ」。さらにここでもまた、こうした2つの相反する人類の危機を回避するために、人間一人一人の根本的な変革（転回）が要請される。すなわち「一方は他方を解決することなしに解決されえない」のであり、「しかし両者の解決には、全歴史の転回点が生ずるほどに人間自身がみずからの人倫的・理性的・政治的現象において変化するという、そういう深いところから出現するのでなければならない力であるところの、人間のもろもろの力を必要とする」のである[39]。

3．技術と原子エネルギーに関するハイデガーとヤスパースの見解をめぐって

（1）技術の本質に関する両者の比較

すでに見てきたように、技術とその本質に関する両者の見解には、明らかに類似点も相違点も散見される。

まず、ハイデガーに関して簡単に確認する。ハイデガーにとって重要なのは、技術の全体を捉えることでも、その当面の目的や効果や影響を概観することでもない。その本質を問うことが何よりも優先されなければならない。ギリシャ以来の技術の本質が隠されたものを「開顕させること」と見なされたのに対して、近代以降の技術は、自然のみならず人間をも「挑発」し、「徴用して立てられた物資」として人間を「かり立て」、いわば「総かり立て体制」へと組み入れること、と特徴づけられた。人間自体を部品の一部として総かり立て

体制へと組み入れる〈技術〉の全体が見渡せない以上、向かうべき方向の全く分からない巨大な体制へとわれわれは例外なく引き込まれ、そこから抜け出せないであろうことは、容易に想像されうる。こうした抵抗不可能な状態の不気味さを、彼はさらに「運命の巧みな遣わし（Geschick）」による「危機（*Gefahr*）」、「ある一つの危機などではなく、まさしく危機そのもの」と呼んでいる[40)]。

他方ヤスパースの技術論に関しては、前述したように、これまで取り上げられる機会はほとんどなかったといっても過言ではない。おそらくその理由の一つとして、彼の技術論が科学的・歴史的・社会的・経済的な観点から総括的に論じられており、幾分表面的な印象を与えることが挙げられるのではないだろうか。実際、ハイデガーとヤスパースの技術論を比較した数少ない論考の一つ、『ヨーロッパ精神の運命』という論文の中で大峰顯は、ヤスパースが近代技術のもつ不可避的な「魔性」を暴露していることをいち早く指摘しているものの、技術自身は中立的な手段にすぎず、そこには「完成の観念も悪魔的な破壊の観念も含まれていない」ことを強調する[41)]。しかしながら本稿第一節の最後で触れたように、ヤスパースは、技術自身によって技術を克服するという課題を最終的に解決可能と考えることがやはり早計であるという認識をもっていたように思われる。ここで再び、技術や悟性や科学的知に対するある種の裂け目と限界状況のような事態が出現せざるをえない。さらに、まさしくそうした技術自身のもつ限界をどのように捉え克服するのかは、いわば悟性的な科学技術を超えた、われわれ自身の内的な〈投企〉にかかっているのである[42)]。

以上、両者の技術（特に科学技術）論の基本的スタンスを比較したが、そこに、明らかな類似点を見出しうるように思われる。

第一に、両者ともに、特に近現代の技術が私たち人間の住まう世界を根底から変質させてしまうという、技術のもつ或る種抗いがたい支配力（強制力）を強調している点であろう。すなわち少なくとも今日の技術は、人間の特殊な目的のための道具として自然を利用し、さらにエネルギーをむしり取って、自然を挑発しかり立てる（ハイデガー）のであり、あるいは、大量生産等の目的のために自然や世界を人間に都合のよい生産工場へと変えてしまい、そこで、これまでの世界には存在しない新しい何ものかを作るために自然が利用され続ける（ヤスパース）のである。第二に、両者に共通する点として挙げられるのが、技術の本質の不可逆的・魔的（デモーニッシュ）な性格に焦点が当てられていることであろう。本稿ですでに述べたように、ハイデガーに比べてヤスパースの方が幾分楽観的な印象を与えるものの、両者ともに技術の制御不可能性を直視しているからである。

次に、両者の相違点について考察する。まず、ハイデガーの技術論の最大の特徴として挙げられるのが、技術に挑発されてかり立てられているのは、自然だけではなくむしろ人間自身にほかならない、という指摘である。もちろんヤスパースの技術論でも、こうした技術の人間自身への強制力（暴力）の可能性は示唆されているのであるが、やはりハイデガーがその危険性を技術の本質と捉えている点で、両者を同一視することはできない。換言すると、たしかに技術が次々に別の目的のための手段として利用されるという点で両者は共通するものの、ハイデガーの技術論では、技術が人間の手を離れて独り歩きを始めるだけでなく、むしろ始めから人間には計り知れない巨大な組織（体制）へと人間を組み入れ、そこで組織の一部として人間自身をもかり立てる運命にあるという洞察が展開されているのである。

（2）原子エネルギーと原爆に関する両者の比較

これまで、近現代の（科学）技術に関するハイデガーとヤスパースの見解について簡単に対比してきたのであるが、最後に、原子エネルギーと原爆に対して二人がどのような態度を表明しているのかを簡単に比較検討する。

先述したように、少なくとも技術論に関しては、両者の相違点よりも類似点の方が散見されたのであるが、原子エネルギーと原爆に関しては、両者の違いは歴然としているように思われる。というのも、特に『原子爆弾と人類の未来』（1958年）の中でヤスパースが原子エネルギーではなく原爆の

脅威を強調していたのに対して、ほぼ同時期の1950年代にハイデガーは、原水爆ではなく、むしろ原子エネルギーの平和利用に警鐘を鳴らしていたからである。ただし、すでに述べたように（軍事利用のみならず平和利用も含めた）原子エネルギー自体に関して、ハイデガーのみならずヤスパースもまた、その制御不可能性と危険性とを指摘しており[43]、両者の間にある程度の類似性があることはやはり否定できないように思われる。とはいうものの、人類と世界に対して加えられる或る根本的な変質（変革）に関して、両者の強調点に少なからぬズレ（乖離）があることも否めない。実際ハイデガーは、原子エネルギーの平和利用が実現し、いわゆる原子力時代が到来した際の不気味さに続いて、さらに次のように述べているのである。

> しかしながら、本当に不気味なことは、世界が一つの徹頭徹尾技術的な世界になる、ということではありません。それよりはるかに不気味なことは、人間がこのような世界の変動に対して少しも用意を整えていない、ということであり、私共が、省察し思惟しつつ、この時代において本当に台頭して来ている事態と、その事態に相応しい仕方で対決するに至るということを、未だに能くなし得ていない、ということであります。――中略――単に人間的であるにすぎない組織は、如何なる組織でも、時代に対する支配を簒奪することは出来ないのであります[44]。

このように、ハイデガーにとって原子エネルギーのもつ本当の不気味さとは、単にそれが人間と世界とを根本的に変えてしまうという事態にあるのでもない。むしろそれは、そうした技術の引き起こす不気味な事態に対して、われわれ人間の側にいかに対峙し思惟すべきかという心構えが全くできていないこと、しかもそのことにすら気付いていないということであり[45]、したがって、そもそもわれわれには、そうした事態への対処の可能性すらあらかじめ奪われている、という洞察なのである。以上のことから、一見するとハイデガーは、原子エネルギーを他の技術とは根本的に異なる特別なものと想定しその脅威を説くだけでなく、それに対して何らか技術的に対処すること自体の不可能性を、したがってあたかも一つの歴史（来歴）的運命としてそれに耐え忍ぶ以外に術はないという、或る種の〈諦観〉を示唆しているかのようにさえ思われる。しかし、やはりハイデガーが原子エネルギーにまつわる技術を他の技術から峻別していると考えるのは早計と言わざるをえないだろう。

むしろ原子エネルギーもまた、「総かり立て体制」という近代技術の本質を最もよく特徴づける技術の一つであり、そうした技術の延長線上に位置づけられうる、と解釈すべきであろう。それゆえヴィッサー（Wisser, R.）の次の指摘は、まさしく的を射ているように思われる。すなわち技術をめぐる「ハイデガーの主要関心事は、単に正しい答えにあるのでも、問題形式にさしこまれた答えに対して回答することでもなく責任応答にあるのだ、と。それゆえ、答えを期待する者は幻滅するだろう」。というのも、そうした者には「いかにして人間は技術との自由な関係を持つことができるのか？」という「一つの問いが課せられている」のであるが、ひとはこの問いに決して通常の仕方で答えることはできないからである。技術との関係において「人間は、すでに集－立（総かり立て体制）の本質領域に立っているからであ」り、「人間は、後になって集－立（総かり立て体制）との関係を取ることなど、決してできないのである。それゆえ、問いは、人間はどのように技術と関係するようになるのか、という問いではない」。「そうではなく、いかにして人間は、自分がすでにそこにおいて存在しているところの関係を、一つの関係として、すなわち、技術の本質に相応しい一つの関係として経験するか、という問いである」[46]。

ここで再びヤスパースに目を転じたい。これまで繰り返し述べてきたように、ヤスパースにとって重要なのは、原子エネルギーの平和利用（すなわち原子力発電）の危険性ではなく、その軍事利用（原水爆による核戦争）の脅威であった。たしかに3.11から10年余りが過ぎた現在の世界情勢に鑑みると、核戦争による人類滅亡（もしくは住民

の大量虐殺）の危機よりも、原子力発電の予期せぬ事故による環境破壊や生命および健康への脅威の方がより切実な問題であることは、疑いない。しかしながら、そもそもハイデガーが危惧していたのは、原水爆の脅威でもなければ、しかしまた原子力発電所の制御不能性でもない。それは、本来的には、とりわけ原子力の利用を通して世界と人類とが巨大な総かり立て体制へと組み込まれ、しかも表面上はそうした技術と共存しつつ、そのことの本質や是非について自ら考えることがほとんど不可能になるという事態であり、さらにそうした事態の不気味さにさえも気づくことがない、という或る種の根本状況なのである。したがって、ハイデガーとの決定的な違いは、ヤスパースが、原水爆による人類絶滅の可能性という〈限界状況〉を想定し、敢えて原子力にまつわるすべての議論を原爆をめぐる究極の〈二者択一〉へと収斂させている点にある、と言えよう。

一方ですでに東西冷戦が叫ばれ、他方で原子力発電がいまだ実験段階にあった1950年代において、ヤスパースが原水爆による全面核戦争こそ解決が急がれる喫緊の問題と見做したことは、21世紀の今日から見ると、さして驚くべきことではないようにも思われる。しかしながら、全面核戦争による人類の現存在的な死滅か、あるいは全体主義支配による自由と実存の事実上の死か、という二者択一を迫ることには、やはりヤスパース哲学に固有の意図が隠されている、と考えざるをえない。おそらくそれは、次のようなものである。

つまり火の発見以来技術は、特に近現代の技術は、われわれ人間に無限の可能性を提供するとともに、人類滅亡の危機すらも突き付けている。したがって、少なくとも原子エネルギー（と、その一つの帰結にほかならない原子爆弾）の発見以降の世界において、われわれは科学技術とその様々な現存在の形態について、これまでのように専門家の立場から、いわば悟性的に具体策を練るだけでなく、全く別の視点から全く新たに考え直さなければならないのである。そしてまさしくそうした新たな視点こそ、「理性」（Vernunft）なのである。ヤスパースの説く「理性」は、「包括者」とともに彼の後期思想を特徴づけるキーワードの一つであるが、ここでは紙数の制約上その詳細について述べることは差し控え[47]、原水爆による人類絶滅という限界状況との関連においてのみ言及するにとどめたい。

これまで繰り返し述べてきたように、ヤスパースの技術論には、技術的・政策的な具体策では解決することのできない緊張と限界状況とが横たわっていたのであるが、その最も象徴的な事態が、前述した〈人類絶滅〉という限界状況（理念）だった。したがって、この究極の限界を一つの〈暗号〉として提起することで、ヤスパースがわれわれを「外的な生産における思考から、内的な行動における思考への、悟性から理性へ（vom Verstand zur Vernunft）の転回点（Wendepunkt）」[48]へと導こうとしていたことは疑いない。それは、われわれ一人一人が個人的・集団的な利害関心から離れ、原爆や全体主義支配の問題に真摯に向き合い、その解決策についてゼロから考え直そうという、われわれ自身の内的な「転回」（Umwendung）を促すものであり[49]、いわばそのための暗号と見なされるべきものと思われる。ただし、「際限のない交わりへの意志」[50]とも言われる〈理性の働き〉を、原爆による絶滅と全体主義支配について忌憚なく〈他者と話し合うこと〉と言い換えることはできない。というのも、ここでの理性にとってより重要なのは、諸々の反核運動や平和運動や人権運動へと向かうことでも、それについて様々な人々と議論することでもなく、どこまでもそうした諸々の柵や固定観念からまず自分自身を開放する〈内的思考〉だからである。

最後に、ハイデガーについて簡単に触れ、本稿を終えることにする。『放下』からの最後の引用でも主張されていたように、技術と原子エネルギーをめぐるハイデガーの議論の焦点は、やはり世界と人間とが生命なき生産工場へと変えられ、すでに人間自身がその一契機として巨大な体制へと不可避的に組み入れられていることに当のわれわれ自身が気づいていないこと、さらにそのことへの絶望的なまでの平穏（無関心）にある、と言えよう。しかし、とはいえ、もちろん彼がそれをあたかも運命として受け止め、或る種の諦観を説いているというわけではない。むしろ、〈技術の本質〉

を問い続け、人間（主観）と技術との根源的な繋がりを探ろうと問い続ける姿勢のうちに、われわれ人間の内奥へのハイデガーなりの〈訴え〉を見出すことができるのではないだろうか。そして二人の主張には表面上明らかな相違が散見されるものの、しかし根底において、やはり何らかの親近性があるように思われてならない[51)]。

注

1）比較的早くから原子力時代の問題点に警鐘を鳴らしていた海外の報告として、次の論集を挙げなければならない。Vgl. Spaemann Robert, *Nach uns Kernschmelze: Hybris im atomaren Zeitalter*, Klett-Cotta, 2011.　ローベルト・シュペーマン、山脇直司、辻麻衣子訳、『原子力時代の驕り』、知泉書館、2012年参照。

2）ここでは、最近取り上げられた代表的なもとして、次の2冊を紹介させていただく。國分功一郎、『原子力時代における哲学』、晶文社、2019年。森一郎、『核時代のテクノロジー論』、現代書館、2020年。また、少し以前のものではあるが、今日なお重要なテキストと思われるものとして、次の書を挙げておきたい。加藤尚武編、『ハイデガーの技術論』、理想社、2003年。

3）國分功一郎、前掲書78-84頁参照。

4）ヤスパースの技術論に関する注目すべき論考として、福井一光、『哲学と現代の諸問題』、北樹出版、2014年を挙げなければならない。

5）Vgl. Heidegger Martin, *Gesamtausgabe, Bd. 7: Vorträge und Aufsätze*, Klostermann V., 2000. マルティン・ハイデガー、関口浩訳『技術への問い』、平凡社、2013年参照。森一郎編訳『技術とは何だろうか？』、講談社、2019年参照。（本稿は、基本的に森一郎訳から引用させていただいた。）

6）ibid., S.7.　前掲書、97頁。

7）ibid., S.7f.　前掲書、97頁。

8）ibid., S.8.　前掲書、98-99頁。

9）ibid., S.9.　前掲書、100頁。

10）Vgl. ibid., S.9ff.　前掲書、100-104頁参照。

11）ibid., S. 13.　前掲書、107-108頁。

12）ibid., S.15.　前掲書、112頁。

13）ibid., S.15f.　前掲書、112-113頁。

14）ibid., S.17.　前掲書、115頁。

15）ibid., S.18.　前掲書、117-118頁。

16）ibid., S.20.　前掲書、120-121頁。

17）ibid., S.21.　前掲書、122頁。

18）Jaspers, Karl, *Die geistige Situation der Zeit*, Gruyter, 1932, 1979, 1995, S22.　カール・ヤスパース、飯島宗享訳、『現代の精神的状況』、理想社、1971年、1986年、34頁。

19）Vgl. ibid., S.22f.　前掲書、35頁参照。

20）Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*, Piper, 1949, 1983, S.129.　ヤスパース、重田英世訳、『歴史の起源と目標』、理想社、1964年、183頁。

21）ibid., S.129.　前掲書、184頁。

22）Vgl. ibid., S.161.　前掲書、229頁参照。

23）ibid., S.131f.　前掲書、186-188頁。

24）Vgl. ibid., S.136ff.　前掲書、193-196頁参照。

25）ibid., S.159f.　前掲書、227頁。

26）ibid., S.160.　前掲書、228頁。

27）Heidegger, ibid., S.16.　ハイデガー、前掲書、113頁。

28）ibid., S.172.　前掲書、26頁。

29）森一郎、『核時代のテクノロジー論』、178頁。

30）Heidegger, *Gelassenheit*, Günther Neske Pfullingen, 1959, 1982, S,20.　ハイデガー、辻村公一訳、『放下』、理想社、1963年、22頁。（なお、旧仮名遣い・漢字について、現代仮名遣い・常用漢字に改めさせていただいた。）

31）ibid., S.12f.　前掲書、10-11頁。

32）ibid., S.16.　前掲書、16頁。

33）Jaspers, ibid., S.130.　ヤスパース、前掲書、185頁参照。

34）Jaspers, *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen.*, Piper, 1958, 1982, S.258.　ヤスパース、飯島宗享・細尾登訳、『現代の政治意識』（下）、理想社、1966年、1980年、30-31頁。

35）ibid., S. 259.　前掲書、33-34頁。

36）ibid., S. 318.　前掲書、153頁。

37）ibid., S. 463.　前掲書、444頁。

38）ibid., S. 1.　ヤスパース、『現代の政治意識』（上）、36頁。
39）ibid., S. 22.　前掲書、38頁。
40）Heidegger, *Vorträge und Aufsätze.*, S.27.　ハイデガー、『技術とは何だろうか？』、132-133頁。
41）大峯顯、『永遠なるもの』「ヨーロッパ精神の運命」、法蔵館、2003年、12-15頁参照。
42）福井一光、『哲学と現代の諸問題』、37-38頁参照。さらに福井は、こうした投企がさしあたり技術者や科学者によって繰り返しなされる必要性を説いたのち、次のように述べている。「しかしその投企を促す本当の根源は、ヤスパースがいうように、人間が自己の欲求を明確にし、検討し、もろもろの欲求間の序列を判然とさせることの中にあ」るのだ、と（前掲書、38頁）。
43）Vgl. *Die Atombombe und die Zukunft des Menschen.*, S.19f.　ヤスパース、『現代の政治意識』（上）、31-34頁参照。たしかにヤスパースが原子力エネルギーに関して、ときにそれが制御可能であるかのような言説を展開していることは否めない。しかしながら、『原子爆弾と人類の未来』の冒頭でヤスパース自身注意を促しているように、部分的な言説を切り離して確定することには危険が伴うのである。（Vgl. ibid., S.5f.　前掲書、3頁参照。）
44）Heidegger, *Gelassenheit.*, S.20f.　ハイデガー、『放下』、22-23頁。
45）國分功一郎、『原子力時代における哲学』、191-192頁参照。
46）Wisser Richard, *Verantwortung im Wandel der Zeit.*, v. Hase & Koehler, 1967, S.281f.　リヒャルト・ヴィッサー、平野明彦・中山剛史・町田輝雄・皆見浩史訳、『責任 ― 人間存在の証』、理想社、2012年、161-162頁。
47）拙論、「ヤスパースにおける理性の復権」、『理想　特集ヤスパース・今』所収、理想社、No.671., 2003年、82-93頁参照。
48）Jaspers, ibid., S.6.　ヤスパース、『現代の政治意識』（上）、4頁。
49）Jaspers, ibid., S.394.　ヤスパース、『現代の政治意識』（下）、305頁。
50）Jaspers, *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte.*, S.326.　ヤスパース、『歴史の起源と目標』、480頁。
51）たしかにヤスパースが一人一人の個の自由と実存と理性に訴えかけているのに対して、ハイデガーが誰に何を訴えかけているのか判然としないという中山の指摘にも、一理あるように思われる。中山剛史、『理想　特集ヤスパース・今』所収、No.671.、105-106頁参照。この点について、また稿を改めて論じることにしたい。さらに、ヤスパースによって提示された例の「二者択一」において、彼が何を訴えたいのか、またその訴えには具体性が欠如しているのではないか、等の疑問が提起されているが、これについても別の機会を待たざるをえない。（Vgl. Anders Günther, *Die atomare Drohung*, C. H. Beck, 1981, 2003, 40ff. ギュンター・アンダース、青木隆嘉訳、『核の脅威』、法政大学出版局、2016年、61-73頁参照。）

付記

本論で引用（参照）されている欧文文献は、イタリックで表記し、初版と引用（参照）文献の発行年を併記した。また、翻訳に関しては、ほぼ既刊の翻訳文献からそのまま引用したが、部分的に改めさせていただいた。

なお本稿は、日本ヤスパース協会第37回大会（2021年、オンライン開催）に於いて行われた講演の原稿の一部（ハイデガーとヤスパースに関する箇所）に、加筆修正を施したものである。